

## アサリの増殖に向けて

アサリは、日本人にとって潮干狩り等で親しまれているなじみ深い食材の一つです。昭和60年頃までは、国内のアサリ漁獲量は毎年10～15万トンで推移していましたが、沿岸域の開発や漁場環境の変化など様々な要因により、漁獲量は年々減少しています。瀬戸内海でも同様にピーク時に4.5万トンであったものが、近年では200トン前後で推移しています(図1)。

このような状況の中、岡山県では平成25年度から国の委託プロジェクト研究により、浅口市寄島町の人工干潟でアサリ資源増大に向けた試験を実施しています。本研究の目的は、人工放流種苗に依存することなく有効な増殖手法を開発することです。アサリ稚貝の減少要因として、波浪による干潟からの逃避や魚類等による食害が考えられました。そこで、全国的に行われているかぶせ網を設置し、その検証を試みました。春季に人工干潟内で稚貝の生息密度が高い場所にポリエチレン製のかぶせ網(2.5×2.5m, 4mm角目)を設置し(図2)、秋季に網の内外のアサリの残存率を比較しました。その結果、網内及び網外の残存率は平均67.1%及び2.0%となり、かぶせ網内においてアサリが高密度に生存していたことが明らかになりました(図3)。また、アサリの成長も網外より網内の方が良い傾向がみられました。このように、アサリ稚貝が比較的多くみられる春季にかぶせ網を設置すれば秋季までの減耗を防止でき、さらにアサリの生育も良く、かぶせ網の有効性が示されました。

しかし、設置した一部の網が波浪でめくれたり土砂の堆積がみられたため、今年度は、網を固定する杭をより強固なものに変更するなど改良を試みています。この結果については、また紹介したいと思います。(開発利用室：泉川)

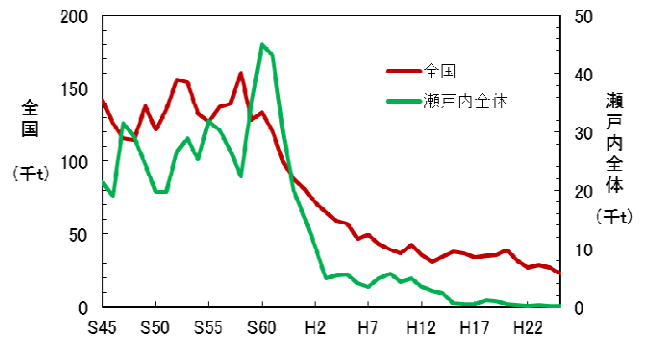


図1 アサリ漁獲量の推移



図2 かぶせ網の設置状況

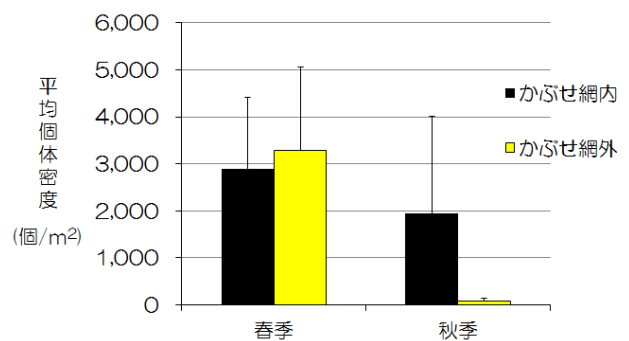


図3 かぶせ網内外のアサリ生息密度の推移